

# 知的障害者の地域参加と余暇活用に関する調査研究

武藏 博文\*・水内 豊和

## Community Participation and Leisure Use for Person with Intellectual Disabilities

Hirofumi MUSASHI, Toyokazu MIZUUCHI

E-mail : musashi@ed.kagawa-u.ac.jp

Mizuuchi and Musashi (2008) investigated the actual situation of the people with intellectual disabilities who graduated from advanced level part of the special support school and lived in the community. This paper aimed to report on the activities in their daily life and their personal relationships.

The majority of respondent answered that their friendships and the use of community resources were limited. On the other hand, there were persons who positively acted according to their interest and lifestyle. They spent with the friend of school days, the companion in the office and the volunteer helper, and regularly participated in family-based activities and club activities. They came influence of school age, their family's ideas and human network in the community.

From the result of this investigation, for use at leisure and learning over life, the service and support that would be requested now were examined.

キーワード：地域参加 余暇活用 個人的人間関係 知的障害者

keywords : community participation, leisure use, personal relationship, person with intellectual disabilities

### I はじめに

我が国の障害者施策は、障害者基本計画（2003年）において「地域において自立し安心して生活できること」を基本に位置づけた。さらに、障害者自立支援法（2006年）により、生活ニーズに応じた様々な生活支援サービスを提供することをめざしている。一方、1979年に養護学校義務制へ移行して以後、特別支援学校で高等部まで教育を受けて卒業し、地域で生活する成人の知的障害者が増加している。このように、知的障害者を取り巻く生活の状況が大きく変化してきた。

管野（2006）は、成人知的障害者のライフステージに応じた地域での生活支援を検討することが必要であると指摘した。就労支援、自立生活支援、学習・余暇支援、コミュニケーション支援の4支援領域を見いだしている。このうち、就労支援、自立生活支援はいくつかの先行研究がある（遠山, 2006; 渡邊・青山, 2007; 八木, 2007等）。成人知的障害者の生活の質を向上させるということからも、生涯にわた

る学習・余暇支援、とくに地域参加と余暇活用に関する支援の方向性を見いだしていくことが求められる。

その手がかりを探るには、地域の社会資源の利用実態を、社会資源の消費者、地域の一員、障害者同士のつながり、生涯学習の受講者といった、異なった視点から構成して捉える必要がある。さらには、そのもとになる知的障害者本人の家族以外の人との関わりの実態を明らかにすることも大切な点である。

水内・武藏（2008）は、富山県内の特別支援学校（これまでの知的障害養護学校）の高等部を卒業して、地域で生活する知的障害者の生活実態調査を実施した。本研究では、この中から、地域の中での活動の実態に関する項目（休日の屋外での過ごし方、地域行事への参加、親の会やサークル活動への参加、習い事）、及び個別的な人間関係に関する項目（保護者以外に休日等で一緒に過ごす人、異性との交際及び結婚に対する考え、友人関係の悩み、本人の相談相手）を取り上げ、成人知的障害者の地域参加と余暇活用の現状を把握して、その問題点を分析し、支援の手がかりについて検討することを目的とする。

\*香川大学教育学部

## II 方法

### 1. 調査対象

富山県下の知的障害者を主な対象とする特別支援学校5校において、これまでに高等部を卒業した者のうち、連絡可能な者全員を対象とした。対象者の総数は1,175名であった。

### 2. 調査内容

生活実態アンケート調査は、①本人の生活状況、②健康やからだの様子、③ふだんの家での生活、④休日等の屋外での過ごし方、⑤地域活動・スポーツ、⑥パソコン・携帯電話の利用、⑦本人の考え、⑧今後の生活の8分野から構成された（水内・武蔵, 2008）。本研究では、そのうち、地域の中での活動の実態、及び個別的な人間関係に関する項目を取り上げる。

### 3. 調査の実施方法と実施時期

調査対象となった各学校及び各学校の同窓会に協力をいただき、往復郵送により調査を実施した。対象者には、同窓会の会報等を通じて調査への協力をお願いするとともに、調査用紙の送付に当たって、調査の趣旨、個人情報の扱い、調査用紙への記入及び返送の方法についての説明文書を同封した。本人がアンケートに記入することが困難な場合、本人の意見や考えがはっきりしない場合は、本人に代わって、保護者が記入するように依頼した。調査の実施期間は2007年5～7月であった。

### 4. 調査の回収と結果の整理

回収総数は17歳から55歳までの367名（回収率31.2%）、男性236名、女性130名、不明1名であっ

た。選択による回答は項目ごとに集計した。記述による回答は重複を避けて整理した。

回答者の年齢は、30歳未満までで全体の63%を占めていた。これは、高等部を卒業して間もない人の方が、同窓会での協力を呼びかけやすく、連絡がつきやすかったことが想定される。

回答者の障害特性については、対象となる知的障害の特別支援学校高等部を卒業したものにも知的障害の程度はさまざまであり、また知的障害以外の障害や、複数の障害を重複しているケースも含まれる。したがって障害の種類や程度については本調査においては厳密に尋ねてはならず、検討に当たっては障害特性の多様性については考慮しないこととした。

## III 結果

### 1. 地域の中での活動の実態

#### (1) 休日の屋外での過ごし方

地域の社会資源の利用状況を知るために、休日等の屋外での活動を、「月に数回程度」と「年に数回程度」に分けて複数選択式で質問した。月数回に323名、年数回に311名から得た回答を図1にまとめた。どちらかでも回答した者は92.4%（339名）、いずれにも回答なしが7.6%（28名）であった。回答なしには「家の外に出たがらない」「歩行が困難で、家で過ごしている」「何もしない」という者がいた。

月数回と年数回のいずれにおいても、「買い物」（月数回66.6%、215名、年数回28.9%、90名）、「外食」（月数回39.3%、127名、年数回31.8%、99名）が多かった。月数回では、「ドライブ」

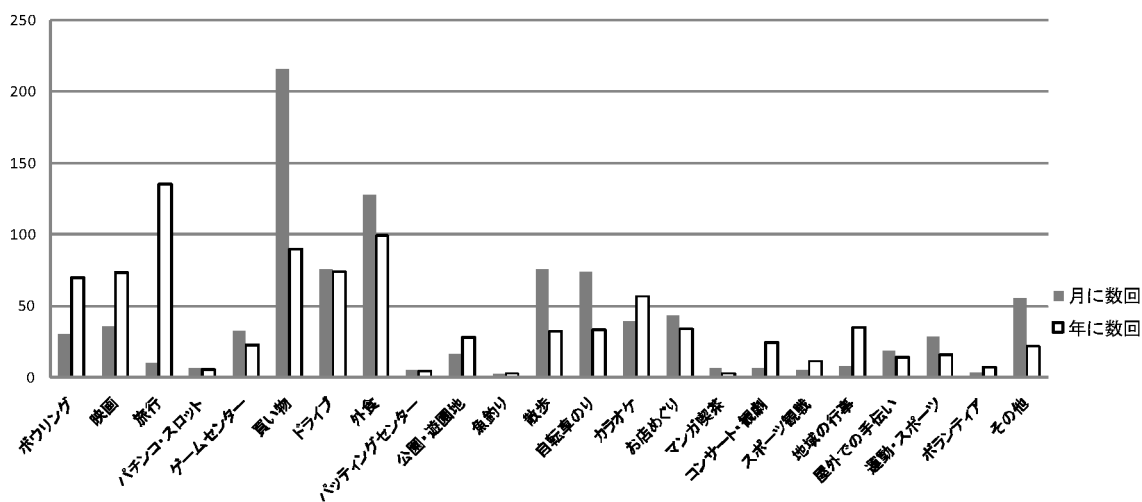


図1 休日の屋外での過ごし方

(のべ人数)

(23.2%, 75名), 「散歩」(23.2%, 75名), 「自転車」(22.6%, 73名)が多く, 年数回では, 「旅行」(43.4%, 135名), 「ドライブ」(23.8%, 74名), 「映画」(23.5%, 73名), 「ボウリング」(22.5%, 70名)が多かった。

「買い物」「外食」は費用負担のかかる消費的な活動である。「ドライブ」「散歩」「自転車」は公共機関や施設の利用を伴わず, 他者の目を気にすることなく, 本人だけで, あるいは保護者・家族と一緒にいることができる。「旅行」「映画」「ボウリング」は施設利用のルール(受付や料金の支払い等)に従えば, 不特定多数の利用者の中で他者とのかわりが少なく行ける活動である。

「その他」の回答には, 「音楽サークル, 楽器演奏」「銭湯, 温泉」「育成会, 青年の会」といった他の設問と重複するものが多かった。「テレビ」「家でゲーム」「友人と出かける」「近所の子と遊ぶ」「電車を見に行く」「畑仕事」「プリクラ」「立

ち読み」「仏の集い」「クリスチャンの会」「法事」等があった。

(2) 地域行事への参加

居住地域でのつながりを知るために, 地域行事への参加を質問した。「参加している」という回答が全体の22.3%(82名), 「していない」が71.1%(261名), 回答なしが6.5%(24名)であった。参加していないが全体の7割をこえ, 居住している地域とのつながりが希薄である者が非常に多い現状が示された。

参加していると回答した者に, その内容を複数選択式で質問し, 得た回答を図2にまとめた。「お祭り」(62.2%, 51名), 「住民運動会」(26.8%, 22名), バーベキューや親睦会・公民館祭等の「地域のレクリエーション」(15.9%, 13名), 「納涼祭・大会」(14.6%, 12名)の回答が得られた。「地域の廃品回収や清掃活動」(15.9%, 13名)のように, 地域で一定の役割を果たす活動に参加している者もいた。

(3) 親の会や障害者が集うサークル活動への参加

メンバーとして定期的に参加する地域の活動を知るために, 親の会やサークル活動への参加を質問した。「参加している」という回答が全体の40.9%(150名), 「していない」が52.3%(192名), 回答なしが6.8%(25名)であった。参加していないが半数をこえ, 定期的に参加する余暇活動をもたずにいる者が多い現状が示された。

参加していると回答した者に, その内容を限定記述式で質問し, 147名から得た回答を表1にま

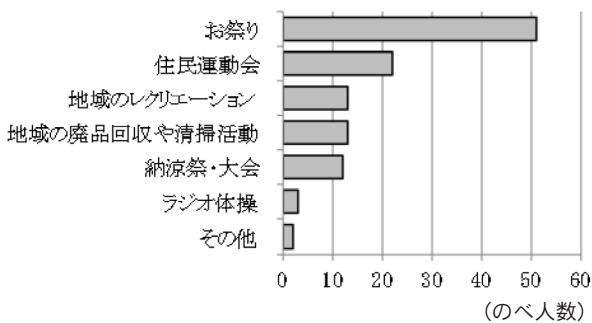


図2 地域行事への参加

表1 親の会・サークル活動の内容

回答者数	147
のべ回答数	278
団体・行事・学校関連	57
育成会, 青年の会, 青年学級, 地域サークル, 障害者のサークル, 本人活動・部会	11
作業所の行事, 施設の行事・園祭, 在宅者交流会, 地域交流会, ふれあいレクリエーション	8
卒業生の集い, 卒業生と親の会, 同窓会	45
活動内容関連	35
新年会, 祭・納涼祭, 運動会, スポーツ大会, クリスマス会, お楽しみ会, 映画会, 演芸会	18
旅行, 日帰り旅行, 親子研修旅行, キャンプ, 社会見学	18
ボウリング	17
フォークダンス, エアロビクス, 体操, よさこい・踊り	17
音楽サークル・バンド, 音楽活動, 音楽クラブ, 音楽の集い, 楽器演奏, 和太鼓, 音楽療法	17
バーベキュー	16
料理サークル, 料理教室	14
スペシャルオリンピックス, 障害者スポーツサークル, スポーツ教室	8
カラオケ	7
ボランティア活動(清掃, 老人ホーム慰問)	5
フラワー教室, アレンジフラワー, 生け花教室	2
絵のサークル	

とめた。育成会や障害者の団体、作業所や施設の行事、卒業生の集いや同窓会をあげた回答と、参加している活動内容そのものをあげた回答に分かれた。

本人が参加する活動内容の中にも、育成会や福祉団体等の主催による行事的活動と考えられるものもあった。クリスマス会やお祭り・納涼祭、スポーツ大会等と、旅行、キャンプ、社会見学等のように年1回から数回程度のものである。

本人の興味等に応じた活動として、フォークダンスやスペシャルオリンピックス、音楽サークル、料理教室、フラワー教室等のように、年間を通じて毎月あるいは隔週程度で行われる活動があげられた。ボウリング、バーベキュー、カラオケ等のように不定期ではあるが年間を通じて随時行っている活動もあった。少数ではあるが、ボランティア活動（駅の掃除や公園の草むしり、老人ホームでの音楽演奏等）という回答もあった。

#### (4) 習い事の受講

生涯学習の一端を知るために、習い事について質問した。「している」という回答が10.9%（40名）、「していない」が83.1%（305名）、回答なしが6.0%（22名）であった。学校卒業後に自分を高める目的で教育的活動に通う者は全体の1割程度しかいなかった。

していると回答した者に、その内容を限定記述式で質問し、35名から得た回答を表2にまとめた。「フォークダンス・よさこい、水泳、体操」等の運動・スポーツが最も多かった。次いで、「エレクトーン、ピアノ」の鍵盤楽器、「ドラム、和太鼓、ギター、三味線」の鍵盤楽器以外の楽器演奏であった。運動・スポーツと楽器演奏で回答の半数以上を占めた。

表2 習い事の内容

回答者数	35
のべ回答数	48
フォークダンス・よさこい、水泳、体操	11
エレクトーン、ピアノ	8
ドラム、和太鼓、ギター、三味線	6
絵画	4
アレンジフラワー・お花	4
料理	4
習字・書道	3
日本舞踊・民謡	3
その他(パソコン、公文、手話、カルチャー教室)	5

## 2. 個人的な人間関係

### (1) 休日に保護者以外で一緒に過ごす人

保護者以外の人との個人的な関係を知るために、休日等で一緒に過ごす人がいるかを質問した。「いる」という回答が37.3%（137名）、「いない」が55.9%（205名）、回答なしが6.8%（25名）であった。いないが全体の半数をこえ、地域での人間関係及び生活範囲が限られ、保護者に依存している者が多い現状が示された。

いると回答した者に、一緒に過ごす人を複数選択式で質問し、133名から得た回答を図3にまとめた。「学校時代からの友人」(29.5%, 54名)、「兄弟姉妹」(27.3%, 50名)が多く、それに続いて「職場の仲間」(10.9%, 20名)、「親類・縁者」(10.4%, 19名)、「ボランティア・ヘルパー」(8.7%, 16名)の順であった。少数ではあるが、「交際相手」(3.3%, 6名)、「近所の友人」(3.3%, 6名)があった。その他(2.7%, 5名)は、「グループホームの世話人」「保護者としか出かけない」というものであった。学校在学時からの友人関係が卒業後も長く続いており、地域での生活に関しても、兄弟姉妹が支援の一端を担っていることがわかった。

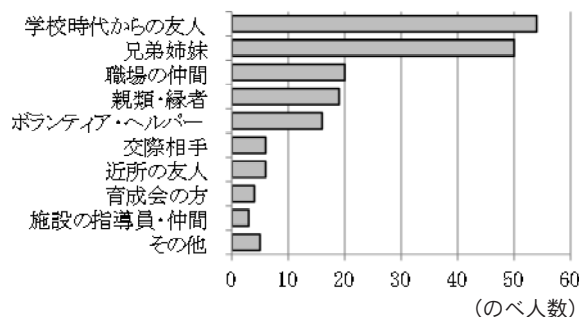


図3 休日に一緒に過ごす人

さらに、いると回答した者に、一緒に出かける先を限定記述式で質問し、120名から得た回答を表3にまとめた。「買い物・ショッピング」が最も多く、次いで「遊技施設」「映画」「外食」「運動・スポーツ」の順であった。費用負担のかかる消費的な活動が多く、保護者や家族と過ごす場合、こうした活動に限定されがちなが示された。

### (2) 異性との交際及び結婚に対する考え

現在、つきあっている人(彼氏・彼女)がいるかを質問して得た回答を図4にまとめた。「いる」という回答が4.1%（15名）であった。つきあっ

表3 保護者以外の人と出かけるところ

回答者数		120
のべ回答数		223
買い物, ショッピング	買い物, ショッピング, スーパーマーケット, デパート, コンビニ, 本屋, ビデオレンタル	51
遊技施設	カラオケ, ゲームセンター, パチンコ	29
旅行・行楽	旅行, 日帰り旅行, 育成会の旅行, ドライブ, イベントに参加, 温泉, 銭湯, お風呂	29
映画	映画鑑賞, ミュージカル	28
外食	外食, 食事, レストラン, 飲食, 食事会, 飲み会	28
運動・スポーツ	ボウリング, スポーツ, ダンス教室, エアロビ, 野球, 体育館, プール	22
屋外活動	公園, 散歩, 山歩き, 動物園, 遊園地	12
地域活動	卒業した学校の行事, 同窓生の会, 地域の行事, 福祉行事・福祉会館, お祭り・七夕祭り, 公共機関の行事, 社会見学・体験	10
知人と出かける	出かける・外出, 電車に乗る, 友達の家, 友人と出かける	10
その他	病院, ディサービス, 親類の家, ボランティア活動に参加	4

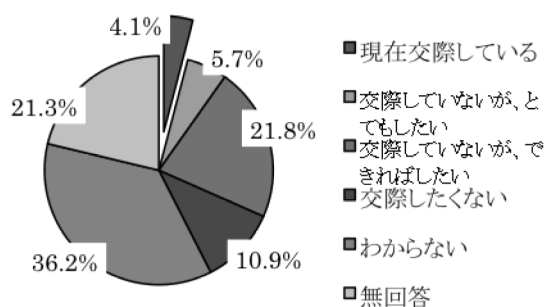


図4 異性との交際

ている人はいないが、「とてもしたい」「できればしたい」を合わせると27.5% (101名) となった。この質問には「交際したくない」(10.9%, 40名), 「わからない」(36.2%, 133名), 回答なし(21.3%, 78名) が非常に多く, 合わせると全体の7割近くとなった。

次いで, 結婚についての考えを質問した。「結婚したい」という回答は全体の16.6% (61名) であった。「したいと思わない」(10.9%, 40名), 「わからない」(52.9%, 193名), 回答なし(19.9%, 73名) を合わせると全体の8割以上となった。

交際や結婚を希望する者がいる一方で, 多くは, 家族や親類以外に休日等に一緒に過ごす人がおらず, 異性との交際自体を考えにくい状況にあることが示された。

(3) 友人関係の悩み

友人関係の悩みについて自由に記述するように求めた。わずか27名(7.4%) からしか回答が得られなかった。重複した内容を整理して表4に

表4 友人関係に関する悩み

回答者数	27
対人的なトラブル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会社に怖い人がいて困る。</li> <li>・強い友達からいじめに遭う。</li> <li>・よく十代の子にお金をせびられる。</li> <li>・宗教を信じている先輩から誘いがある。</li> <li>・男性から遊びに行こうと強引に誘われた。</li> <li>・携帯で長電話をし, 3・4万円以上の請求が来た。</li> <li>・飲みたくないのに酒をすすめられ注文してしまった。</li> </ul>
コミュニケーションのつまづき・障害	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションがとれない。会話にならない。</li> <li>・ふざけあったりすることで度が過ぎることがある。</li> <li>・自分の興味のある事を何回も聞いてくる。</li> <li>・知らない人と一緒にいやで, 行事等に参加できない。</li> <li>・話をしたいが, 相手にしてもらえない。</li> <li>・融通があまり利かないこと。</li> </ul>
友人経験の少なさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同窓会や学校の行事だけは行きたくない。</li> <li>・住むところが変わっただけで, 連絡も取れなくなった。</li> <li>・友人が働いていないので, なんでもおごっている。</li> <li>・友人関係をもてない。</li> </ul>
友人がいない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人と会う機会がない。</li> <li>・友人がいない。</li> <li>・特定の友人がいない。</li> <li>・友人は機械(テレビ, ビデオ, DVD等)のみ。</li> </ul>
親・家族の負担	<ul style="list-style-type: none"> <li>・映画やカラオケ等へ行くとき親の送迎が必要。</li> <li>・出かけるのにつきあわせれ, 年齢と共に親が疲れてきた。</li> </ul>
将来への不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢化とともに健康のこと。</li> <li>・現在は楽しく働いているが, 親亡き後のことが心配。</li> </ul>

まとめた。

人とかかわりの中で不利益や不快な状況を被った対人的トラブルに関する記述が多かった。「怖い人がいて困る」「いじめに遭う」「せびられる」「強引に誘われた」等である。本人の対人関係の苦手や脆さに付け入ったものといえる。

次いで、コミュニケーションそのものをうまくとれない記述があった。「会話にならない」「度が過ぎる」「何回も聞いてくる」「一緒に参加できない」「融通が利かない」等である。本人の社会的関係のつまずきや障害に起因すると考えられる。

さらに、本人だけでは対人的な関係をうまく保てない記述があった。「行きたくない」「連絡が取れなくなった」「何でもおごっている」等である。友人関係での前向きな経験の不足によると考えられる。

友人そのものがないという記述はより深刻である。「友人がいない」「機械のみ」等である。その他に、親・家族の負担、将来への不安等が出された。

#### (4) 本人の相談相手

個人的なサポートの状況を知るために、本人が悩みを相談する人がいるかを質問した。「いる」という回答が全体の63.4% (233名)、「いない」が15.8% (58名)、回答なしが20.7% (76名)であった。

いると回答した者に、相談相手を複数選択式で質問し、230名から得た回答を図5にまとめた。「両親」(44.2%, 179名)がもっとも多く、「兄弟姉妹」(14.1%, 57名)、「作業所や施設の指導員」(13.8%, 56名)の順であった。少数であるが、「支援センターの先生、ジョブコーチ」(0.7%, 3名)、「メール友達」(0.2%, 1名)があった。その他(1.0%, 4名)は「自分からは相談

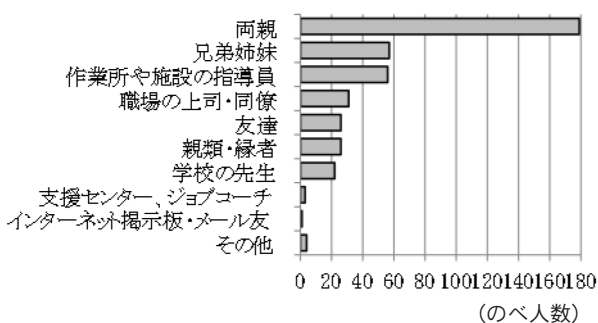


図5 本人の相談相手

できない」等であった。相談相手に関しても、保護者への依存が高い現状が示された。

## IV 考察

成人知的障害者の地域参加と余暇活用の実態を探るために、地域の中での活動の実態と個人的な人間関係をまとめて報告した。地域資源の利用や人間関係に限られる者が多くいる一方で、学校時代の友人や職場の仲間、ボランティアと過ごし、親の会やサークル活動に定期的に参加して前向きに活動する者もいた。本人の特性や障害もあるが、学校時代の経験、ライフスタイルや家族の考え、地域での人的ネットワークが影響していた。

### 1. 地域の中での活動の実態

地域で利用できる資源が限られ、定期的な活動に参加していない者が多かった。地域の中で生活するには、①働くこと、②暮らすこと、③楽しみ学ぶことが重要となる。継続的に楽しみ学ぶために、地域資源を掘り起こし、利用を促す試みが大切である(村田・村田・小倉, 2007)。

屋外での過ごし方は、買い物や外食等の費用負担のかかる消費的な活動が多く、ドライブや散歩のような公共の施設を避けたものが多かった。公共の施設を利用する場合も、映画やボウリング等の対人的かわりが少なくすむものであった。保護者や家族と利用する場合、こうした活動に限定されがちである。まず、現在ある資源をよりうまく利用することを考えるべきであろう。障害のある人も安心して利用できる仕方を提案し、実際に経験できる機会を用意することが求められる。

近年、地域の住民活動が乏しくなってきたといわれるが、そうした中でも、地域行事に参加している者もいた。居住する地域住民がどのような理解と受け入れをすれば、あるいは障害のある人がどのような参加の仕方をすれば、可能となるのかを掘り下げて検討することが必要であろう。

定期的に参加している活動には、育成会や福祉団体が主催する行事的活動が多かった。その一方で、本人の興味やライフスタイルに応じた様々な活動も報告された。障害のある人自身のニーズに基づいて、本人中心の自助的な活動を育て、地域に根づかせていくことが大切である。服部(2002)が指摘するように、「与えられる余暇」ではなく、本人の自己決定が尊重されるような余暇活動の支援方策も検

討する必要があるだろう。

学校卒業後に、社会教育的活動に通う者は非常に少なかった。学校を卒業したら「～できなくなった」「～を忘れてしまった」という話を聞く。長い人生を有意義に送り、自分を高めるために、意図的に学習する場を持つことが必要である。障害のある人自身、あるいは本人に代わり保護者や家族がこうした場を求めて、自ら投資して機会を作り出すことが必要であろう。知的障害者を対象とした大学の公開講座等の取り組みとその成果も近年は報告されており(松矢, 2004), 富山県においても生涯学習の機会の創出が課題である。

## 2. 個人的な人間関係

休日と一緒に過ごす人が、保護者だけ、あるいは兄弟姉妹であるという者が多かった。これでは、保護者や家族の負担、本人のストレスの高い状態が続いてしまう。その一方で、ボランティアやヘルパーを利用する、サークル活動に参加する者も少なからず存在した。個別の支援者を確保して、外出し集うための活動の場を充実させることが必要である。こうした支援サービスを要求し利用することを促していくことが求められる。

学校時代からの友人関係が卒業後も長く続いており、卒業後に新たな友人に出会うことは限られていた。このことは、特別支援学校在学時に、どのような友人を持ち、友人との活動を体験するかが、その後の地域参加を方向付けることを示している。学校教育の段階から、卒業後の地域での生活を見通したグループ活動を育成することが重要である。

男女交際や友人関係で、対人的トラブルを避け、自分の身を守って、人間関係を継続し発展させることに難しさがあった。しかも身近な相談相手は保護者であることが多かった。本人を支える地域のキーパーソンが大切であるが、本人が独力で見つけることは無理がある。地域の中で、相談相手となる人を紹介して合わせる仕組みが必要である。

## 謝辞

調査の実施に当たり、富山県立にいかわ養護学校、富山県立しらとり養護学校、富山県立高岡養護学校、富山県立となみ養護学校、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校の各学校及び各学校の同窓会の皆さんに多大な協力を得ました。記して感謝申し上げます。

## 文献

- 服部伸一(2002): 知的障害者と地域生活—余暇活動への支援を中心に—『余暇学研究』第5号, 66-73.
- 管野敦(2006): 知的障害の成人期理解と生涯発達支援『発達障害研究』第28巻, 3, 183-192.
- 松矢勝宏(2004): 知的障害のある青年や市民へのプログラム—オープンカレッジ実践から『ノーマライゼーション』第24巻4, 20-22.
- 水内豊和・武蔵博文(2008): 知的障害者の地域生活の実態に関する調査研究『とやま特別支援学年報』第2号, 27-40.
- 村田昌俊・村田珠枝・小倉靖範(2007): 道北圏域における自閉症児者の生活実態調査『情緒障害教育研究紀要』第26号, 33-40.
- 遠山真世(2006): 『障害者生活実態調査』にみる障害者の就業問題『Int'l ecowk/国際経済労働研究』2006年11・12月号, 25-31.
- 渡邊雅俊・青山登志夫(2007): 知的障害児・者における居宅生活支援サービスの現状と課題に関する調査『静岡英和学院大学紀要』第5巻, 173-185.
- 八木敬雄(2007): 知的障害者グループホームに関する調査—知的障害者の地域生活への移行の条件『大阪青山短期大学研究紀要』第32巻, 1-12.

(2008年10月20日受付)

(2009年1月21日受理)

